

特別活動を中核としたキャリア教育に関する研究 ——特別活動と教科等との関連を中心として——

百 瀬 光 一
下 崎 聖

はじめに

中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）では、特別活動の今後の課題の3視点に、「複雑で変化の激しい社会の中で求められる能力を育成するという視点」¹⁾がある。そこでは、キャリア教育を学校教育全体で進めていく中での特別活動が果たす役割が大きく期待されている²⁾。また、そのための具体的な改善事項として、小・中・高等学校の学級（ホームルーム）活動の指導内容の構成の中に、「一人一人のキャリア形成と実現」³⁾が設置されることとなった。このことにより、特別活動では、キャリア教育を小学校段階から系統的・段階的に推進していくことが明確化された。以上のことから、次期学習指導要領における特別活動は、キャリア教育を推進していく上での中核的な役割が期待されている。

さらに、文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－」（2006年11月）によれば、「キャリア発達には、児童生徒が行う全ての学習活動等が影響するため、キャリア教育は、学校の全ての教育活動を通して推進され

なければならない」⁴⁾ものでもあるので、特別活動で行うキャリア教育と各教科・領域で行うキャリア教育とを有機的に関連させた指導も必要となる。この点に関して、特別活動におけるキャリア教育に関する先行研究を概観すると、特別活動を単独で行った実践の他に、特別活動と各教科・領域とを関連付けた実践も行われている。しかしながら、中学校、高等学校、特別支援学校における特別活動と各教科・領域とを関連付けたキャリア教育の実践は、小学校に比して少なく、これから追究すべき重要な課題であるといえる⁵⁾。

以上のことを踏まえ、本研究⁶⁾では、特別活動の中核としたキャリア教育の在り方について追究する。具体的には、今回は、特別支援学校高等部（知的障害）に在籍する生徒を対象に、特別活動の中核として、教科の職業と国語とを関連させたキャリア教育に関する単元を開発し、授業実践を通して、その有用性について検証することにした。そのための検証方法として、①生徒の授業の感想、②授業後に生徒に実施したアンケート調査、③授業者の評価の3つ⁷⁾を用いることにした。

1 キャリア教育で育成する資質・能力

キャリア教育は、中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（1999年12月16日）において提唱されたものである。そこでは、キャリア教育を望ましい職業観・勤労観及び職業に関する知識や技能を身に付けさせるとともに、自己の個性を理解し、主体的に進路を選択する能力・態度を育てる教育とし、小学校段階から発達段階に応じて実施する必要があるとしている⁸⁾。この答申を基にして、国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（2002年11月）が出された。この中で、「職

業観・勤労観を育むための学習プログラムの枠組み（例）」⁹⁾が示され、キャリア教育で育成する資質・能力の「4領域8能力」¹⁰⁾が提案された。

具体的には、①人間関係形成能力（「自他の理解能力」、「コミュニケーション能力」）、②情報活用能力（「情報収集・探索能力」、「職業理解能力」）、③将来設計能力（「役割把握・認識能力」、「計画実行能力」）、④意思決定能力（「選択能力」、「課題解決能力」）¹¹⁾である。

その後、中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011年1月31日）では、キャリア教育を「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」¹²⁾とし、さらに、社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力について整理し、「4領域8能力」から、新たに「基礎的・汎用的能力」¹³⁾が提唱された。

具体的には、①人間関係形成・社会形成能力（具体的要素：他者の個性を理解する力、他者に働きかける力、コミュニケーション・スキル、チームワーク、リーダーシップ等）、②自己理解・自己管理能力（具体的要素：自己の役割の理解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレスマネジメント、主体的行動等）、③課題対応能力（具体的要素：情報の理解・選択・処理等、本質の理解、原因の追究、課題発見、計画立案、実行力、評価・改善等）、④キャリアプランニング能力（具体的要素：学ぶこと・働くことの意義や役割の理解、多様性の理解、将来設計、選択、行動と改善等）¹⁴⁾である。

また、知的障害のある児童生徒用のキャリア教育で育成する資質・能力を示したものとして、木村宣孝・菊池一文が開発した「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」¹⁵⁾が提案された。

具体的な資質・能力として、①人間関係形成能力（人とのかかわり、集団参加、意思表現、挨拶・清潔・身だしなみ、自己理解・他者理解、協

力・共同、場に応じた言動)、②情報活用能力(様々な情報への関心、社会資源の活用とマナー、金銭の扱い、はたらくよろこび、情報収集と活用、金銭の使い方と管理、役割の理解と働くことの意義、法や制度の活用、消費生活の理解)、③将来設計能力(習慣形成、夢や希望、やりがい、生きがい・やりがい、進路計画)、④意思決定能力(目標設定、自己選択、振り返り、自己選択(決定・責任)、肯定的な自己評価、自己調整)¹⁶⁾がある。

さらに、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)別紙」(2016年12月21日)では、「キャリア教育に関わる資質・能力」¹⁷⁾として、「基礎的・汎用的能力」の4つの能力(「人間関係形成・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」、「キャリアプランニング能力」)を統合的に捉え、資質・能力の三つの柱¹⁸⁾に沿って整理した。

具体的には、①知識・技能(「学ぶこと・働くことの意義の理解」、「問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりするための方法に関する理解と、そのために必要な技能」、「自分自身の個性や適性等に関する理解と、自らの思考や感情を律するために必要な技能」)、②思考力・判断力・表現力等(「問題を発見・解決したり、多様な人々と考えを伝え合って合意形成を図ったり、自己の考えを深めて表現したりすることができる力」、「自分が『できること』『意義を感じる』『したいこと』をもとに、自分と社会との関係を考え、主体的にキャリアを形成していくことができる力」)、③学びに向かう力・人間性等(「キャリア形成の方向性と関連づけながら今後の成長のために学びに向かう力」、「問題を発見し、それを解決しようとする態度」、「自らの役割を果たしつつ、多様な人々と協働しながら、よりよい人生や社会を構築していこうとする態度」)¹⁹⁾である。

一方、特別活動におけるキャリア教育としては、学級（ホームルーム）活動や学校行事、児童（生徒）会活動等において実践が行われてきた²⁰⁾。さらに、次期学習指導要領では、小・中・高等学校の特別活動の学級（ホームルーム）活動の指導内容として、新たに「一人一人のキャリア形成と実現」が設置されることとなった。これは、「主として将来に向けた自己の実現に関わる内容であり、一人一人の主体的な意思決定を大事にする活動。教育課程全体を通して行うキャリア教育との関連を図るとともに、個に応じた学習の指導・援助や、個別の進路相談等との関連を図る」²¹⁾（下線：百瀬）ものであるとし、特別活動におけるキャリア教育に関する指導内容及び育成すべき資質・能力などが示された。

以上より、キャリア教育を学校教育全体で進めていくためには、キャリア教育で育成すべき資質・能力を明確化していくことが重要となる。

2 キャリア教育の課題と特別活動を中核とした関連的指導の必要性

文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－」（2006年11月）（以後、「手引」と略記）によれば、キャリア教育の課題として、「従来、進路指導を中心とする学校教育の取組においては、発達課題の達成を支援する系統的な指導・援助といった意識や観点が希薄であったり、実践を通した指導方法の蓄積が少なかったりしたことなどから、取組が全体として脈絡や関連性に乏しく、多様な活動の寄せ集めになってしまいがちとなり、生徒の内面の変容や能力・態度の向上等に十分結びついていけないきらいがあった」²²⁾としている。

また、中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支

援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）（以後、「答申」と略記）によれば、キャリア教育について、「例えば、職場体験活動のみをもってキャリア教育を行ったものとしているのではないか、社会への接続を考慮せず、次の学校段階への進学のみを見据えた指導を行っているのではないか、職業を通じて未来の社会を創り上げていくという視点に乏しく、特定の既存組織のこれまでの在り方を前提に指導が行われているのではないか、といった課題も指摘されている。また、将来の夢を描くことばかりに力点が置かれ、『働くこと』の現実や必要な資質・能力の育成につなげていく指導が軽視されていたりするのではないか、といった指摘もある」²³⁾としている。

さらに、「答申」によれば、「キャリア教育は、小学校から高等学校まで教育活動全体の中で『基礎的・汎用的能力』を育むものであるが、狭義の『進路指導』との混同により、中学校・高等学校においては、入学試験や就職活動があることから本来の趣旨を矮小化した取組になっていたり、職業に関する理解を目的とした活動だけに目が行きがちになったり、小学校では特別活動において進路に関する内容が存在しないため体系的に行われてこなかったりしている実態がある」²⁴⁾としている。

これらの指摘された課題を克服するための方策の一つとして、特別活動の中核として、各教科・領域とを関連させながら、学校の教育活動全体を通してキャリア教育を進めていくことが重要となる。「手引」においても、「例えば、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の取組が、児童生徒のキャリア発達を支援する観点に立って、有機的に関連付けられているのかどうか」²⁵⁾という視点で教育課程を改善することの必要性を指摘している。「答申」においても、特別活動の学級（ホームルーム）活動の中核としながら、総合的な学習（探究）の時間や学校行事、各教科・科目等における学習、個別指導としての進路相談等の機会を生かしつつ、学校の

教育活動全体を通じて行うことが求められるとしている²⁶⁾。

以上のことから、キャリア教育を効果的に推進していくためには、特別活動の中核とした各教科・領域との関連的指導も必要となる。ところで、先述した通り、特別活動におけるキャリア教育に関する先行研究では、中学校、高等学校、特別支援学校における特別活動と各教科・領域とを関連させた実践研究は少ない。このことから、本研究は、意義があるといえる。

3 特別活動の中核としたキャリア教育に関する実践

第1章では、キャリア教育で育成する資質・能力を明確化することの重要性を、第2章では、特別活動の中核とした各教科・領域との関連的指導の必要性について指摘した。これらのことを踏まえ、本章では、特別支援学校高等部（知的障害）に在籍する生徒を対象に、特別活動の中核として、教科の職業と国語とを関連させたキャリア教育に関する単元の開発と、その授業実践について詳述する。

（1）特別活動の中核としたキャリア教育に関する単元開発

1）実践学級及び生徒の実態

実践学級は、A 県立 B 養護学校高等部（知的障害）の1年生の男子3名、女子4名からなる学級である。4月より、明るく伸び伸びと学校生活を送っており、学習や諸活動等に対して真面目に一生懸命に取り組もうとしている。学級の課題は、コミュニケーション能力の向上である。具体的には、自分の意思をしっかりと相手に分かるように伝えたり、相手の思いや願いを受けとめながら行動に移したりすることである。個々の生徒の障害の実態は、どの生徒も軽度の知的障害である。卒業後は、生徒全員が企業への就労を目指している。

2) 開発した単元

① 単元名

単元名は、「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えよう」である。この単元名をつねに授業のテーマとして提示しながら、生徒の授業に対する目的意識を明確化させることにした。

② 単元目標

第1章で述べた「4領域8能力」、「基礎的・汎用的能力」、「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」、「キャリア教育に関わる資質・能力」、次期学習指導要領の特別活動の学級活動（ホームルーム活動）の指導内容である「一人一人のキャリア形成と実現」、及び現行の特別支援学校高等部学習指導要領の国語の目標²⁷⁾と職業の目標²⁸⁾を参考にしながら、本単元の目標を下記の表1にまとめた。

表1 本単元の目標

【基礎的・汎用的能力】	【単元目標と資質・能力の三つの柱】
「人間関係形成・社会形成能力」	ア：自分の思いや考えを分かりやすくクラスの友達に教えることができる。【思考力・判断力・表現力等】 イ：友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を伝えることができる。【知識・技能】
「自己理解・自己管理能力」	ウ：企業内職場体験学習における自分の長所及び課題を理解することができる。【知識・技能】 エ：自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができる。【学びに向かう力・人間性等】
「課題対応能力」	オ：友達の発表を参考にしながら、次年度の現場実習に生かそうとすることができる。【学びに向かう力・人間性等】
「キャリアプランニング能力」	カ：次年度の現場実習における自分なりの目標を持つことができる。【学びに向かう力・人間性等】

③ 単元展開の概要

単元展開の概要は、図1の通りである。全25時間扱いで、2017年1月下旬から2月中旬にかけて実施した。特別活動のホームルーム活動を中核として、教科の職業と国語とを関連させることにした。

先述した「手引」によれば、特別活動（道德、総合的な学習の時間）は、「それらが各教科の学習で学んだ成果等を様々な体験活動や話し合い活動等を通して深化・発展、統合させたり、逆に、その成果を教科の学習に還元し反映させていくというねらいを持っている」²⁹⁾としている。このことを踏まえ、ホームルーム活動と職業との関連では、職業の授業で設定した企業内職場体験学習での学びをホームルーム活動の時間に、「ほめられたこと」、「注意されたこと・アドバイスされたこと」を中心にじっくりと振り返らせ、自分の良さや課題を明確化させるようにした。さらに、そのことを次の企業内職場体験学習の目標設定に生かせるようにした。ホームルーム活動と国語との関連では、ホームルーム活動で振り返った企業内職場体験学習での体験から、クラスみんなに教えたいことを3つ選択させ、それをプレゼンテーションする活動を国語の時間に設定することにした。さらに、実施したプレゼンテーションを基にしながら、ホームルーム活動では、次年度の現場実習における自己目標を決定させるようにした。

具体的な指導としては、職業の授業で設定した企業内職場体験学習では、下崎と担任のC教諭が分担して個々の生徒が学習している7カ所の事業所を巡回し、個別指導を行うことにした。ホームルーム活動の授業では、下崎とC教諭とのティーム・ティーチングで行い、全体指導は下崎が、個別指導は個々の生徒の実態を詳しく把握しているC教諭がそれぞれ担当した。そこでは、次の「④活用する学習カード」で示す学習カード①（表2参照）を活用して、企業内職場体験学習の振り返りを行った。国語の授業は、下崎が担当した。同様に学習カード②と③（表3、表4参照）

を活用し、企業内職場体験学習で学んだことを3つ選択させ、そのことをプレゼンテーションを通してクラスの友達に教え合うことにした。

なお、国語の授業で行ったプレゼンテーションは、紙芝居プレゼンテーション法³⁰⁾を用いることにした。紙芝居プレゼンテーション法は、伝えたい事柄(ポイント)をA4判半紙に書き出し、それを黒板等に貼りながら発表するプレゼンテーション法で、百瀬・下崎の先行研究で、その有用性(分かりやすく伝え合うことができることなど)が確認されている³¹⁾。よって、本研究でもこの紙芝居プレゼンテーション法を用いることにした。具体的には、学習カード③の鉤括弧の内容をA4判半紙(シート)に書き写し、それを順番に黒板に提示しながら発表していくものである。

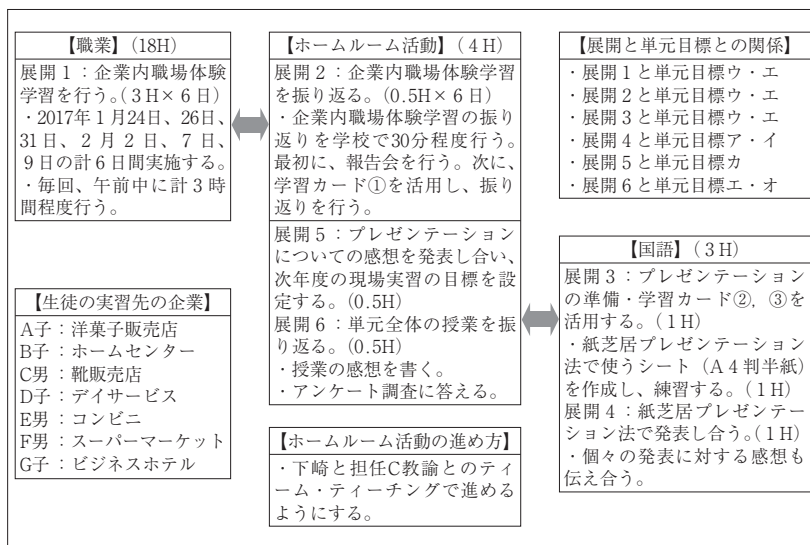


図1 単元展開の概要

④ 活用する学習カード

図1の単元展開の概要で示した、学習カード①、②、③について紹介する。表中の斜体で表記された内容は、実際にF男が記したものである

(表2、表3、表4を参照)。F男は、スーパーマーケットで企業内職場体験学習を行った。

学習カード①は、生徒が、企業内職場体験学習の振り返りを学校で行う時に活用するものである。振り返る内容は、「その日取り組んだ作業内容」と、「職場の方から指摘されたこと（ほめられたこと、注意されたこと・アドバイスされたこと）」の2点である。

学習カード②は、学習カード①を基に、生徒にクラスの友達に教えたいことを3つ選択させるために活用するものである。また、タイトルは「みんなのために、これだけは教えたい重要ポイントベスト3」とし、次のプレゼンテーションに対する生徒の意欲の喚起もねらった。なお、下線及び括弧内は、百瀬が加筆修正を施したものである。

表2 学習カード①

企業内職場体験学習の振り返り 名前 (F 男) (※①②の両方を書いてよいし、どちらか一つでもよい。)		
【月・日】 (曜日)	【その日取り組んだ作業内容】	【職場の方から指摘されたこと】
		①ほめられたこと ②注意されたこと・アドバイスされたこと
1月24日 (火)	・青果の品出し ・ねびき作業 ・片付け	①最初の挨拶を元気な声でできていたので良かったです。 ②お客様を意識して作業をやること。
1月26日 (木)	・青果の品出し ・清掃	②お客様に対してもっと積極的に挨拶をすれば楽しく仕事ができると思います。
1月31日 (火)	・青果の品出し ・乳製品品出し	①お客様に対しての挨拶が大きくなっていいと思った。
2月2日 (木)	・加工作業	①野菜をていねいに袋づめを行う事が速いと思った。
2月7日 (火)	・品出し ・加工作業 ・見切り作業 ・日付点検	①目標に対して行動ができていて良かったです。
2月9日 (木)	・青果の品出し ・加工作業 ・なっとうの品出し	①仕事の大変さ、達成感等を感じました。

表 3 学習カード②

みんなのために、これだけは教えたい重要ポイントベスト 3		
順位	伝えたい重要ポイント	それを選んだ理由
1 位	自分の目標をめざして作業に取り組んでよかったです。	自分の目標は、挨拶を（に）取り組むことです。お客様に挨拶ができなかったけど（、）自分で工夫して挨拶ができてよかったです。
2 位	自分からあまり挨拶をできることが（することが）できなかったけど少しずつ大きな声で挨拶を（に）取り組めたことです。	お客様に対してあまり挨拶をむけられる（する）事ができませんでした。自分自信（身）で工夫をして挨拶に取り組めたのでよかったです。
3 位	初めは、お客様に挨拶をすることができませんでした。自分自信（身）で工夫をくわえながら（ら）挨拶に取り組めたのでよかったです。	初めはお客様に対して挨拶をすることができなかったけど（、）少しずつお客様に対して挨拶ができたのでよかったです。自分自信（身）で工夫して挨拶ができたのでよかったです。

表 4 学習カード③

「紙芝居プレゼンテーション法」でみんなに教えよう!!	
これから、みんなに伝えたい企業内職場体験学習で体験した重要ポイントが3つあります。	
1つめは、「挨拶」	」です。
理由は、（お客様の顔を見て挨拶ができたのでよかったです	）からです。
2つめは、「目標」	」です。
理由は、（自分で工夫して挨拶ができてよかったです	）からです。
3つめは、「意識」	」です。
理由は、（お客様を意識して挨拶ができてよかったです	）からです。
以上の3つが、みんなに教えたい企業内職場体験学習で体験した重要ポイントです。	

学習カード③は、学習カード②に記述した内容を基に作成する。これが生徒のプレゼンテーション用の発表原稿となる。この発表原稿は、全体説明、細部説明、全体説明という順の構成で成り立つ SDS 法³²⁾を用いることにした。この SDS 法を用いた百瀬・下崎の先行研究より、その有用性（発表者にとっては自分の考えが整理でき、聞き手にとっては分かりやすく聞けることなど）が確認されている³³⁾。よって、本研究でもこの SDS 法を活用することにした。また、生徒には、同時に学習カード③の鉤括弧の内容を A 4 判半紙に書き写させ、紙芝居プレゼンテーション法で用いるシートも作成させた。

このように、学習カード①は「振り返り」、学習カード②は「3つ選択」、学習カード③は「SDS 法による発表原稿の作成」で活用する。百瀬・下崎の先行研究においても、「振り返り」→「3つ選択」→「SDS 法による発表原稿の作成」という3つの流れに対応した3種類の学習カードを活用させることで、生徒に発表に対する自分の思いや考えの具体的なイメージ化を図らせることができたことが確認されている³⁴⁾。よって本研究でも、学習カード①、②、③という順番で活用させることを通して、生徒に発表に対する自分の思いや考えの具体的なイメージ化を図らせることをねらった。

(2) 授業実践における生徒の様子

授業実践における生徒の様子について、①生徒の授業の感想、②授業後に生徒に実施したアンケート調査、③授業者の評価の3点から紹介する。

1) 生徒の授業の感想

下記に、生徒個々の授業の感想を紹介する。なお、下線及び括弧内は、百瀬が加筆修正を施したものである。

① A子の感想

- ・ 自分が職場体験でやってきたことを発表（すること）ができたので良かったです。もうちょっと声を大きくだせばいいと思った。台本を見ずに読みたいと思った。

② B子の感想

- ・ 気をつけないといけない所や反省点等しっかりと知れたので良かったです。もっと大きな声で発表をしたい。紙をあまり見ないで言えるようにしたい。言葉をしっかりとまとめたい。

③ C男の感想

- ・ みんな職場体験へ行って何を学んで来た（か）が分かった。もっと

大きな声で言えればよかった。

④ D 子の感想

- ・ あまり上手く声が大きく出せなかった。なので、今回は、この（ような）機会をする事があるのであれば、もう少し声の音量を出していきたいです。あまりクラス皆の顔が見られなかったのでごんねんでした。基本の札（礼）とかをする事が意識できなかったのがごんねんでした。意識をして行うことが今回できなかったのがごんねんでした。もう少し、大きな声でやりたかった。もう少し皆の目を見て行いたい。

⑤ E 男の感想

- ・ 皆がどんな考（え）をもち自分がどんなかだいがあるかなどがわかった。あんきをしてもっとどうどうとしたい。

⑥ F 男の感想

- ・ 友達に紹介する事は、難しい事だと思いました。前に立って3つ答えることは、いいけいけんだと思いました。もっとれいをていねいにやればよかったと思いました。

⑦ G 子の感想

- ・ 皆なが（皆の）発表のさいにこうりつよく学習でおそわってきたことが伝わってよかった。声を大きくいえたらいい。はやくちでいわずにゆ（っ）くりといたい。

D 子は、プレゼンテーション本番での発表の態度面のみを記述しているが、他の生徒は、発表の態度面以外に本研究で設定したプレゼンテーションそのものの意義に関わる感想も記述している。

例えば、A 子は、「自分が職場体験でやってきたことを発表（すること）ができたので良かったです」と、F 男は、「前に立って3つ答えることは、いいけいけんだと思いました」と、それぞれ自分の企業内職場体験

学習で体験したことをみんなに伝えられた良さについて、B子は、「気をつけないといけない所や反省点等しっかりと知れたのでよかったです」と、企業内職場体験学習での自分の課題が明確になったことの良さについて、C男は、「みんな職場体験へ行って何を学んで来た（か）が分かった」と、クラスの友達が学んだことが知れたことについて、E男は、「皆がどんな考（え）をもち自分がどんなかだいがあるかなどがわかった」と、クラスの友達の考えと自分の課題が理解できたことについて、G子は、「皆なが（皆の）発表のさいにこうりつよく学習でおそわってきたことが伝わってよかった」と、クラスの友達が職場実習で学んだことを効率良く知れたことの良さについて、それぞれ記述している。

2) 授業後に生徒に実施したアンケート調査

下記に、アンケートの質問項目とそれに対する結果を示す。

① 企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えるために、この授業に意欲的に取り組みましたか？

- ・ とても意欲的に取り組めた・・・・・・・・・・ 5名（C男、D子、E男、F男、G子）
- ・ 少し意欲的に取り組めた・・・・・・・・・・ 2名（A子、B子）
- ・ あまり意欲的に取り組めなかった・・・・・・・・ 0名
- ・ まったく意欲的に取り組めなかった・・・・・・・・ 0名

② 「紙芝居プレゼンテーション法」を用いて、自分の重要ポイントを分かりやすくクラスの友達に教えることができましたか？

- ・ とても分かりやすく教えることができた・・・・ 4名（A子、C男、F男、G子）
- ・ 少し分かりやすく教えることができた・・・・ 2名（D子、E男）

- ・ あまり分かりやすく教えることができなかった・・・1名 (B子)
- ・ まったく分かりやすく教えることができた・・・0名

③ 友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分の感想を友達に分かりやすく伝えることができましたか？

- ・ とても分かりやすく伝えることができた・・・2名 (C男、G子)
- ・ 少し分かりやすく伝えることができた・・・5名 (A子、B子、D子、E子、F男)
- ・ あまり分かりやすく伝えることができなかった・・・0名
- ・ まったく分かりやすく伝えることができた・・・0名

④ 企業内職場体験学習における自分の長所や課題を理解することができましたか？

- ・ とても理解することができた・・・3名 (A子、B子、E男)
- ・ 少し理解することができた・・・4名 (C男、D子、F男、G子)
- ・ あまり理解することができなかった・・・0名
- ・ まったく理解することができなかった・・・0名

⑤ 自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができましたか？

- ・ とても持つことができた・・・4名 (B子、C男、E男、G子)
- ・ 少し持つことができた・・・3名 (A子、D子、F男)
- ・ あまり持つことができなかった・・・0名
- ・ まったく持つことができなかった・・・0名

⑥ 友達の発表を参考にしながら、次の現場実習に生かそうとする気持ち
が持てましたか？

- ・ とても持てたと思う・・・・・・・・・・・・・・・・ 5名（A子、B子、C男、F男、G子）
- ・ 少し持てたと思う・・・・・・・・・・・・・・・・ 2名（D子、E男）
- ・ あまり持てたとは思わない・・・・・・・・・・・・ 0名
- ・ まったく持てたとは思わない・・・・・・・・・・・・ 0名

⑦ この発表会は、次の現場実習や将来の就職に向けて参考になりましたか？

- ・ とても参考になった・・・・・・・・・・・・・・・・ 4名（A子、C男、E男、G子）
- ・ 少し参考になった・・・・・・・・・・・・・・・・ 3名（B子、D子、F男）
- ・ あまり参考にならなかった・・・・・・・・・・・・ 0名
- ・ まったく参考にならなかった・・・・・・・・・・・・ 0名

⑧ 次の現場実習での自分なりの目標を持つことができましたか？

- ・ しっかりと持つことができた・・・・・・・・・・・・ 3名（B子、C男、G子）
- ・ 少し持つことができた・・・・・・・・・・・・ 3名（A子、E男、F男）
- ・ あまり持つことができなかった・・・・・・・・・・・・ 1名（D子）
- ・ まったく持つことができなかった・・・・・・・・・・・・ 0名

質問項目の①「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教

えるために、この授業に意欲的に取り組みましたか?」、③「友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を友達に分かりやすく伝えることができましたか?」、④「企業内職場体験学習における自分の長所や課題を理解することができましたか?」、⑤「自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができましたか?」、⑥「友達の発表を参考にしながら、次の現場実習に生かそうとする気持ちが持てましたか?」、⑦「この発表会は、次の現場実習や将来の就職に向けて参考になりましたか?」の6つに対しては、生徒全員の肯定的な回答を得ることができた。

質問項目の②『『紙芝居プレゼンテーション法』を用いて、自分の重要ポイントを分かりやすくクラスの友達に教えることができましたか?』に対しては、B子以外の生徒からは肯定的な回答を得ることができた。しかし、B子は「あまり分かりやすく教えることができなかった」と、否定的な回答を示した。また、質問項目の⑧「次の現場実習での自分なりの目標を持つことがきましたか?」に対しては、D子以外の生徒からは肯定的な回答を得ることができた。しかし、D子は「あまり持つことができなかった」と、否定的な回答を示した。

3) 授業者の評価

授業者の下崎による評価は、表5の通りである。A評価(十分に目標を達成)、B評価(目標を達成)、C評価(目標を達成できなかった)の3段階評価³⁵⁾とした。

単元目標のA「自分の思いや考えを分かりやすくクラスの友達に教えることができる」に対しては、A評価が5名(A子、C男、D子、E男、G子)、B評価が2名(B子、F男)という結果となった。単元目標のイ「友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を伝えることができる」に対しては、A評価が4名(C男、E男、F

男、G 子)、B 評価が 3 名 (A 子、B 子、D 子) という結果となった。単元目標のウ「企業内職場体験学習における自分の長所及び課題を理解することができる」に対しては、A 評価が 4 名 (B 子、C 男、E 男、G 子)、B 評価が 3 名 (A 子、D 子、F 男) という結果となった。単元目標のエ「自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができる」に対しては、生徒全員が A 評価という結果となった。単元目標のオ「友達の発表を参考にしながら、次年度の現場実習に生かそうとすることができる」に対しては、A 評価が 5 名 (C 男、E 男、F 男、G 子)、B 評価が 2 名 (A 子、B 子、D 子) という結果となった。単元目標のカ「次年度の現場実習における自分なりの目標を持つことができる」に対しては、A 評価が 6 名 (A 子、B 子、C 男、E 男、F 男、G 子)、B 評価が 1 名 (D 子) という結果となった。

全体を通して、設定した 6 つの単元目標において、どの生徒も B 評価以上となり、目標を達成することができた。しかしながら、細部を見ると、全員 A 評価となったのは、単元目標のエ「自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができる」のみであり、他の目標に関しては、A 評価の生徒と B 評価の生徒とが混在する結果となった。

表5 授業者による評価

単元の目標	A子	B子	C男	D子	E男	F男	G子
ア：自分の思いや考えを分かりやすくクラスの友達に教えることができる。 【人間関係形成・社会形成能力】	A	B	A	A	A	B	A
イ：友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を伝えることができる。【人間関係形成・社会形成能力】	B	B	A	B	A	A	A
ウ：企業内職場体験学習における自分の長所及び課題を理解することができる。【自己理解・自己管理能力】	B	A	A	B	A	B	A
エ：自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができる。【自己理解・自己管理能力】	A	A	A	A	A	A	A
オ：友達の発表を参考にしながら、次年度の現場実習に生かそうとすることができる。【課題対応能力】	B	B	A	B	A	A	A
カ：次年度の現場実習における自分なりの目標を持つことができる。 【キャリアプランニング能力】	A	A	A	B	A	A	A

次に、授業者の下崎が評価の根拠とした個々の生徒の授業の様子について、良さと課題の2点から紹介する。

① A子の様子

・ 良さ

自分が企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをはっきりとした声でクラスみんなに伝えることができた。また、企業内職場体験学習での自己体験をじっくりと振り返り、そのことをクラスみんなにプレゼンテーションをして教え合うことを通して、自分の課題を克服しようとする意欲も喚起し、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標を設定することができた。

・ 課題

クラスの友達の発表に対する感想を伝える場面では、単に「～がよかったです」という表現に終始していた。また、自分の課題は明確化でき

たが、自分の長所については意識が向けられなかった。

② B子の様子

・ 良さ

企業内職場体験学習での自己体験をじっくりと振り返り、そのことをクラスみんなにプレゼンテーションをして教え合うことを通して、自分の長所と課題の両方を明確化し、さらに自分の課題については、頑張って克服しようとする意欲も喚起することができた。同時に、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標も設定することができた。

・ 課題

プレゼンテーションでは、下を向きながら、小さな声で早口の発表となった。また、クラスの友達の発表に対する感想発表では、「～について私もそう思いました」、「～がよく分かりました」という表現に終始していた。

③ C男の様子

・ 良さ

プレゼンテーションの準備活動に意欲的に取り組むことができた。発表もはっきりとした声で分かりやすく伝えることができた。また、自分の長所と課題をしっかりと理解し、その上で明らかとなった自分の課題を克服しようとする意欲も喚起することができた。同時に、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標も設定することができた。

・ 課題

聞き手に対して、さらに分かりやすく伝えるためにはどうすればよいかを考えながら発表してほしい。

④ D子の様子

・ 良さ

自分が企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをはっきりとした声

でクラスのみんなに伝えることができた。また、企業内職場体験学習での自己体験をじっくりと振り返り、そのことをクラスのみんなにプレゼンテーションをして教え合うことを通して、自分の課題を克服しようとする意欲も喚起することができた。

・ 課題

クラスの友達の記事に対する感想を伝える場面では、単に「～がよく分かりました」という表現に終始していた。また、自分の課題は明確化できたが、自分の長所については意識が向けられなかった。さらに、次年度の現場実習に向けた目標設定に対しては、不安を抱きながらの取り組みとなった。

⑤ E男の様子

・ 良さ

企業内職場体験学習も含めた全ての活動において意欲的に取り組むことができた。プレゼンテーションもはっきりとした大きな声で分かりやすく発表することができた。また、自分の長所と課題を理解し、その上で自分の明らかとなった課題を何とか克服しようとする意欲も喚起することができた。同時に、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標も設定することができた。

・ 課題

さらに、聞き手を意識しながら、話す速さや声のトーンを工夫して発表できるように努力してほしい。

⑥ F男の様子

・ 良さ

クラスの友達の記事に対する感想発表では、友達の記事内容の良さについて、自分なりに考えた理由を添えながら伝えることができた。また、企業内職場体験学習での自己体験をじっくりと振り返り、そのことをク

ラスのみんなにプレゼンテーションをして教え合うことを通して、自分の課題を克服しようとする意欲も喚起することができた。同時に、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標も設定することができた。

- ・ 課題

吃音があるために、発表内容で聞き取りにくい箇所があった。また、自分の課題は明確になったが、自分の長所に対しては意識が向けられなかった。

⑦ G 子の様子

- ・ 良さ

企業内職場体験学習の振り返り活動やプレゼンテーション活動においては、とても意欲的に取り組むことができた。プレゼンテーションもはっきりとした声で発表することができた。また、自分の長所と課題をしっかりと理解し、その上で自分の明らかとなった課題を克服しようとする意欲も喚起することができた。同時に、次年度の現場実習に向けた自分なりの目標も設定することができた。

- ・ 課題

聞き手に対して、さらに分かりやすく伝えるためにはどうすればよいかを意識しながら発表してほしい。

4 考察

先述した生徒の授業の感想、授業後に生徒に実施したアンケート調査、授業者の評価の3つを基にしながら、本研究で開発した特別活動を中核として、教科の職業と国語とを関連させたキャリア教育に関する単元の有用性について検証する。

(1) 生徒の授業後の感想

A 子と F 男の感想は、企業内職場体験学習での自己体験をクラスの友達に伝えられた良さについて、B 子の感想は、企業内職場体験学習での自分の課題を明確化した良さについて、C 男と G 子の感想は、クラスの友達が企業内職場体験学習で学んだことが知れた良さについて、E 男の感想は、企業内職場体験学習を通してのクラスの友達の考えや自分の課題が知れた良さについて、それぞれ記述した。これらの内容は、どれも本単元で設定した目標に関わるものである。

例えば、A 子と F 男の感想は、単元目標ア「自分の思いや考えを分かりやすくクラスの友達に教えることができる」に関わっている。B 子の感想は、単元目標ウ「企業内職場体験学習における自分の長所及び課題を理解することができる」の下線部に関わっている。C 男と G 子の感想は、単元目標イ「友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を伝えることができる」の下線部に関わっている。E 男の感想は、先の単元目標イとウの下線部に関わっている。これらのことは、企業内職場体験学習での自己体験をじっくりと振り返りながら、まとめて整理し、そのことをクラスみんなにプレゼンテーションをして教え合った本単元の学習成果であるということができる。

しかしながら、D 子は、プレゼンテーションでの態度面（声量、礼の仕方、目線等）を記述した。この点に関して授業者の下崎は、今回実施したプレゼンテーション活動の学びを企業内職場体験学習での挨拶の声量や会釈等にも生かしたいという授業者の願いが、特に D 子には強く影響したからではないかと省察している。

(2) 授業後に生徒に実施したアンケート調査の結果

アンケートの質問項目の①「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えるために、この授業に意欲的に取り組みましたか?」は、設定した授業に対する意欲について、質問項目の②「『紙芝居プレゼンテーション法』を用いて、自分の重要ポイントを分かりやすくクラスの友達に教えることができましたか?」は、単元目標アの到達度について、質問項目の③「友達の企業内職場体験学習での様子を理解し、それに対する自分なりの感想を友達に分かりやすく伝えることができましたか?」は、単元目標イの到達度について、質問項目の④「企業内職場体験学習における自分の長所や課題を理解することができましたか?」は、単元目標ウの到達度について、質問項目の⑤「自分の課題を克服しようとする意欲を持つことができましたか?」は、単元目標エの到達度について、質問項目の⑥「友達の発表を参考にしながら、次の現場実習にか生かそうとする気持ちが持てましたか?」は、単元目標オの到達度について、質問項目の⑦「この発表会は、次の現場実習や将来の就職に向けて参考になりましたか?」は、設定した発表会の意義につて、質問項目の⑧「次の現場実習での自分なりの目標を持つことができましたか?」は、単元目標カの到達度について、それぞれ調査するものである。その中の質問項目①、③、④、⑤、⑥、⑦は、生徒全員の肯定的な回答が得られた。

質問項目①の結果に関しては、単元名の「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えよう」をテーマに、ホームルーム活動と職業、国語が有機的に関連したので、生徒の「クラスの友達に自分が実習で学んだ重要ポイントを教えたい」という意識が高まり、生徒の学習意欲が喚起されたと解釈することができる。

質問項目③の結果に関しては、「紙芝居プレゼンテーション法」を用い

たことで、クラスの友達の企業内職場体験学習での様子について、順番に提示されるシートを見ながら発表を聞くので、音声による理解の他、視覚的理解も同時に促されたので、生徒全員の肯定的な回答を得ることができたと解釈することができる。このことは、質問項目⑥の結果とも連動している。クラスの友達の企業内職場体験学習での様子の理解が促されたことによって、そこでの学びを次年度の現場実習に生かそうとする気持ちも喚起され、生徒全員の肯定的な回答を得ることができたと解釈することができる。

質問項目④の結果に関しては、学習カードを活用しながら、企業内職場体験学習をじっくりと振り返り、さらに、自分の考えをまとめ、整理していくことで、自分の長所や課題が明確化していき、生徒全員の肯定的な回答を得ることができたと解釈することができる。このことは、質問項目⑤の結果とも連動している。自分の課題が明確化されたことによって、自分の課題を克服しようとする意欲も喚起され、生徒全員の肯定的な回答を得ることができたと解釈することができる。

質問項目⑦の結果に関しては、ホームルーム活動と職業、国語との有機的な関連が図れたので、質問項目①、③、④、⑤、⑥の結果とも連動し、生徒達にとっては有意義な発表会となり、次の現場実習や卒業後の就職にも参考にしたいという生徒全員の肯定的な回答につながったと解釈することができる。

しかしながら、質問項目①については、B子が、質問項目⑧については、D子が否定的な回答を示した。B子が否定的な回答を示した要因について、授業者の下崎は、B子自身の発表に対する苦手意識が、自己評価にも影響を及ぼしている点を指摘している。今回のような紙芝居プレゼンテーション法を用いた発表会は、この実践学級にとっては、まだ2回目であるので、このような機会を継続して設定していくことが今後の課題として重要とな

る。

さらに、D 子が否定的な回答を示した要因について、授業者の下崎は、D 子は今回の企業内職場体験学習で明確化した自分の課題をどうクリアしていけばよいのかという見通しがまだはっきりと持てていなかったために不安を抱き、否定的な回答を示したと推察している。今後の課題としては、生徒に短期及び長期の目標設定をさせる場面で、個々の実態に応じた目標を達成するための見通しを持たせる指導を丁寧に行っていくことが必要となる。

（３）授業者による評価

全体としては、設定した 6 つの単元目標において、生徒全員が B 評価以上となり、目標を達成することができた。この要因として、授業者の下崎は、次の 3 点を指摘している。すなわち、①単元名である「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えよう」をテーマに、ホームルーム活動の中核に職業と国語とが有機的に関連し合って、生徒の意識に効果的に働いたこと、②活用した 3 種類の学習カードが、生徒に企業内職場体験学習での振り返りを促し、自分の思いや考えを整理し、まとめていく上で効果的であったこと、③紙芝居プレゼンテーション法を用いたことにより、生徒は自分の思いや考えを分かりやすくクラスの友達に伝えたり、クラスの友達の思いや考えに対する理解を促したりすることができたことの 3 点である。このことにより、生徒全員が、設定した 6 つの目標の全てに到達することができたと考察することができる。

しかしながら、全員 A 評価となったのは、単元目標エのみであり、他の目標に関しては、A 評価の生徒と B 評価の生徒とが混在する結果となった。このことについて、授業者の下崎は、次のように解説している。

- ・ 単元目標アに関しては、紙芝居プレゼンテーション法は、シートを発

表順に提示しながら発表していくので、生徒は見通しを持ちながら、安心して発表に臨むことができた。しかしながら、B 評価となった B 子は、発表に対して苦手意識を持っているために声が小さくなり、聞き手側の意識に立った分かりやすい発表までには至らなかった。なお、F 男は吃音があるため、B 評価となった。

- ・ 単元目標イに関しては、生徒全員が前半の目標部分である「友達の企業内職場体験学習での様子を理解し」までは到達したが、後半の「それに対する自分なりの感想を伝えることができる」に関しては、クラスの友達の企業内職場体験学習での様子に対しての自分の思いや考えを上手く言葉で表現できず、単に「～が良かったです」、「～がよく分かりました」、「～について私もそう思いました」という表現にとどまった生徒がいた（A 子、B 子、D 子）。今後は、クラスの友達の発表に対する感想を自分なりに表現することを促すための学習カードの開発も必要となる³⁶⁾。この単元目標イの評価は、単元目標オの評価とも連動し、ただ単に「～が良かったです」、「～がよく分かりました」、「～については私もそう思いました」という表現にとどまり、「友達の発表を参考にしようとする」ことの明確な根拠を得るまでには至らなかった（A 子、B 子、D 子）。
 - ・ 単元目標ウに関しては、生徒全員が自分の課題を明確化することができたが、自己肯定感が低いためか、自分の長所に対して意識が向けられていない生徒がいた（A 子、B 子、F 男）。今後は、自己肯定感を高めていくための教材・単元開発も重要となる。
 - ・ 単元目標オに関しては、D 子以外の生徒は、迷わず 2 年次に行く現場実習に対する自分なりの目標を設定することができた。しかし、D 子も悩みながらも何とか自分なりの目標を設定することができた。
- 単元目標オの目標設定に関する補足として、A 子は、「あいさつができ

るようにする、身だしなみを整える」と、B子は、「作業中に手を止めないようにする、挨拶を大きな声でする、効率よく手早く行う、商品を落とさないように丁寧に行う」、C男は、「1カ月間の職場実習なので、職場の方とのコミュニケーションをとり、仕事の（で）やる事をおぼえる」、D子は、「挨拶と返事、言葉遣い、丁寧差（さ）、スピード、コミュニケーションを、今後上手く使っていきたい！、気配り、目配り、思いやりの心をもっとやşıなっていきたい！」と、F男は、「りんきおうへんに、気づきを大事にしたい、集中をしっかりとし（、）ミスをすくなくしたい、今回よくできたことを次もいかしていきたい」と、G子は、「時間をまもって作業に取り組む、作業に集中をして速く作業をやりながら挨拶をする」と、それぞれ2年次に行く現場実習に対する自分なりの目標を設定することができた。なお、下線及び括弧は、百瀬が加筆修正を施したものである。

（4）まとめ

以上の生徒の授業の感想、授業後に生徒に実施したアンケート調査、授業者の評価の考察から、知的障害を持つ生徒が、キャリア教育で育成したい資質・能力を身に付けることができたのは、特別活動（ホームルーム活動）を中核として、教科の職業と国語とを関連させた単元の学習が、生徒に効果的に働いたからであると結論付けることができる。

具体的には、①単元名の「企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントをみんなに教えよう」をテーマに、ホームルーム活動を中核に職業と国語とが有機的に関連し合って、生徒の「友達に自分が企業内職場体験学習で学んだ重要ポイントを教えたい」という学習意欲を喚起させたこと、②活用した3種類の学習カードが、生徒に企業内職場体験学習での振り返りを促し、自分の思いや考えを整理し、まとめていく上で効果的に働いたこと、③紙芝居プレゼンテーション法を用いたことは、生徒にとって、クラスの

友達に自分の思いや考えを分かりやすく伝えたり、クラスの友達の思いや考えを理解したりする上で有効であったことが指摘できる。

課題としては、①聞き手を意識させた発表の機会を継続的に設定していくこと、②発表に対する感想などを自分なりに表現することを促すための学習カードを開発すること、③生徒の自己肯定感を高めるための教材・単元開発を行っていくこと、④生徒に短期及び長期の目標設定をさせる場面で、個々の実態に応じた目標を達成するための見通しを持たせる指導を行っていくことである。

おわりに

以上、本研究では、特別活動の中核としたキャリア教育の在り方について追究した。具体的には、特別支援学校高等部（知的障害）に在籍する生徒を対象に、特別活動の中核として、教科の職業と国語とを関連させたキャリア教育に関する単元を開発し、授業実践を通して、その有用性について検証した。①生徒の授業の感想、②授業後に生徒に実施したアンケート調査、③授業者の評価の3つの方法を用いて検証した結果、本研究で開発した単元は、キャリア教育で育成する資質・能力を生徒に身に付けさせる上で、有用性が高いことを確認することができた。課題は、①聞き手を意識させた発表の機会を継続的に設定していくこと、②発表に対する感想などを自分なりに表現することを促すための学習カードを開発すること、③生徒の自己肯定感を高めるための教材・単元開発を行っていくこと、④生徒に目標設定をさせる場面で、個々の実態に応じた目標を達成するための見通しを持たせる指導を行っていくことの4点が明らかとなった。

また、今回の研究では、特別支援学校の高等部の生徒を対象に、特別活動の中核として、各教科・領域とを関連付けたキャリア教育の実践研究を

行った。さらに、今後は、中学校、高等学校における特別活動と各教科・領域とを関連付けたキャリア教育の授業・単元開発も重要となる。今後の課題として追究していきたい。

注・引用文献

- 1) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（2016年12月21日）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf, p.229（2017年3月4日検索）。
- 2) 同上書1）、p.230を参照。
- 3) 同上書1）、p.232。
- 4) 文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引－児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために－」（2006年11月）、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/_icsFiles/afieldfile/2010/03/18/1251171_001.pdf, p. 8（2017年3月4日検索）。
- 5) CiNii Articles で、「特別活動 キャリア教育」をキーワードとして検索をしたところ、全52件が検索された（2017年3月1日検索）。その内、特別活動におけるキャリア教育に関する実践研究は24件あり、特別活動を単独とした実践は14件（小学校9件、中学校2件、高等学校2件、高等専門学校1件、特別支援学校0件）、特別活動と各教科・領域とを関連付けた実践は10件（小学校7件、中学校1件、高等学校2件、特別支援学校0件）であった。また、それらは、特別活動の学級（ホームルーム）活動、学校行事、児童（生徒）会活動等で行われていた。なお、特別支援学校におけるキャリア教育の実践で、特別活動を単独とした実践と特別活動と各教科・領域とを関連付けた実践の双方で0件という検索結果になったのは、特別支援学校におけるキャリア教育は、教科の職業や、「領域・教科を合わせた指導」として行われる日常生活の指導・生活単元学習・作業学習等を中心に進められているからであると推察することができる。
- 6) 本研究は、百瀬と下崎との協議によって進めてきたものである。本稿の執筆は、百瀬が担当し、授業実践及び表5の評価は、下崎が中心となって進めた。また、本研究は、公表も含め、生徒及び学校長の承諾を得て進めてきたものである。
- 7) ①生徒の授業の感想、②授業後に生徒に実施したアンケート調査、③授業者の評価の3つによる授業研究の検証方法は、百瀬・下崎の共同研究での検証場面で有用性があることが確認されている。このことから、本研究でも活用することにし

- た。この3つの検証方法を用いた先行研究として、百瀬光一・下崎聖「特別支援学校に在籍する生徒のコミュニケーション能力を高めるための教材・単元開発に関する研究－クラス集団内での共同学習を通して－」『山梨学院大学法学論集』第74号、2014年、pp.116-99と、百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み－紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して－」『教材学研究』第27巻、2016年、pp.77-86、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究－アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して－」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104がある。
- 8) 中央教育審議会「初等中等教育と高等教育との接続の改善について（答申）」（1999年12月16日）、<http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/20kyariasiryou/20kyariasiryou.hp/2-01.pdf>、p.39を参照（2017年2月28日検索）。
 - 9) 国立教育政策研究所生徒指導研究センター「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について（調査研究報告書）」（2002年11月）、http://www.nier.go.jp/shido/centerhp/23career_shiryoushu/2-1-5.pdf、pp.44-48を参照（2017年2月28日検索）。
 - 10) 同上書9）、pp.47-48を参照。
 - 11) 同上書9）、pp.47-48を参照。
 - 12) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）」（2011年1月31日）、http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf、p.16（2017年2月28日検索）。
 - 13) 同上書12）、pp.23-26を参照。
 - 14) 同上書12）、pp.25-26を参照。
 - 15) 木村宣孝・菊池一文「特別支援教育におけるキャリア教育の意義と知的障害のある児童生徒の『キャリアプランニング・マトリックス（試案）』作成の経緯」『国立特別支援教育総合研究所研究紀要』第38巻、2011年、pp.3-17を参照。
 - 16) 同上書15）、p.15を参照。
 - 17) 中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）別紙」（2016年12月21日）http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/12/27/1380902_2.pdf、p.26（2017年3月4日検索）。
 - 18) 前掲書1）、pp.28-31を参照。そこでは、①「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く『知識・技能』の習得）」、②「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成）」、

- ③「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養）」を資質・能力の三つの柱として整理した。
- 19) 前掲書17)、p.26。
- 20) 注5)を参照。
- 21) 前掲書1)、p.232。
- 22) 前掲書4)、p.8。
- 23) 前掲書1)、pp.55-56。
- 24) 前掲書1)、p.233。
- 25) 前掲書4)、p.8。
- 26) 前掲書1)、p.56を参照。
- 27) 文部科学省『特別支援学校 幼稚園教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領』海文堂出版、2009年、p.188。
- 28) 同上書27)、p.192。
- 29) 前掲書4)、p.9。
- 30) 川嶋直『KP法 シンプルに伝える紙芝居プレゼンテーション』みくに出版、2013年を参照。
- 31) 同上書30)を参照。その有用性が確認できた先行研究として、前掲書7)で示した百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み－紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して－」『教材学研究』第27巻、2016年、pp.77-86、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究－アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して－」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104がある。
- 32) 箱田忠昭『「できる人」の話し方&コミュニケーション術 なぜか、「他人に評価される人」の技術と習慣』フォレスト出版、2005年、pp.100-103を参照。
- 33) その有用性が確認できた先行研究として、前掲書7)で示した百瀬光一・下崎聖「特別支援学校に在籍する生徒のコミュニケーション能力を高めるための教材・単元開発に関する研究－クラス集団内での共同学習を通して－」『山梨学院大学法学論集』第74号、2014年、pp.116-99と、百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究－アクティブ・ラーニングの視点を用いた教材開発を通して－」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104がある。
- 34) 前掲書7)で示した百瀬光一・下崎聖「学校生活に対する意欲を高めるためのプレゼンテーション活動に関する研究－アクティブ・ラーニングの視点を用いた教

材開発を通して－」『教材学研究』第28巻、2017年、pp.93-104に詳しい。

- 35) 前掲書7)で示した百瀬・下崎の3つの先行研究においても、3段階評価で個々の生徒の評価を行った。今回の研究においても、授業者の下崎が使い慣れているという点を考慮し、この3段階評価を用いることにした。
- 36) 同様に、前掲書7)で示した先行研究における別の実践学級においても、発表者に対するリアクションを返すために活用する「学習カード」が課題となった。これらのことから、発表するために必要な学習カードだけでなく、自分なりのリアクションを返すために必要な学習カードの開発も重要となる。百瀬光一・下崎聖「双方向性のあるコミュニケーション能力を育成するための導入的指導の試み－紙芝居プレゼンテーション法を用いた教材の活用を通して－」『教材学研究』第27巻、2016年、p.85を参照。

謝辞

A 県立B養護学校のD校長先生及びC先生には、本研究を進めるにあたり多大なる協力を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。